【研究ノート】

月を読む人びと
―マレーシア、サバ州都市近郊に暮らすドゥスンの自然利用―

西山　文愛

総合研究大学院大学　文化科学研究科　地域文化学専攻

要　旨

本稿は、ボルネオ島サバ州の都市近郊に暮らす先住民ドゥスンの人たちの自然利用の場で観察された「月」とのかかわりを主題として扱う。それにより、都市化が進むドゥスン社会で今もなお実践されている自然活動の外観を描き出すことを本稿の目的としている。

ドゥスンの人びとは焼畑・水田耕作を中心に、熱帯林や川を利用した狩猟採集や漁労活動を実践することで、身近な自然資源を生活に利用してきた。このような自然資源を利用した生活は、熱帯雨林の環境改変、生業の変化、信仰の変化にともない変化が起きている。

本稿が対象としているKD集落は、ペナンパンの市街から車で約15分と都市への移動が容易な立地でありながら、集落はクロッカー山脈から流れる川の麓に位置し、その周囲は熱帯林に囲まれている。そのため、集落においても環境改変や生業、宗教の変化が起きている一方で、周囲の熱帯林や集落の周囲にある林一帯、川、畑において自然を利用した活動を今も積極的におこなっている。

さらに、筆者が2018年に実施した調査で、人々が自然を利用した活動の場において、月の満ち欠けを指針にしていたことが明らかになった。ドゥスンと月の関係についてはすでに1940年代にコタ・ブル地方のドゥスン社会を調査したイバンズの報告がある。そこで、本稿では筆者の調査結果とエバンスによるドゥスンと月の報告を比較検討することで、2000年代の当該社会における月の役割を検討する。それにより、近代的な営みと自然資源を利用した活動が絡み合う、現代ドゥスン社会の自然とのかかわりの一端を明らかにしたい。

キーワード：ボルネオ、サバ州、ドゥスン、月、自然利用、文化変容

1. はじめに
1.1 研究の目的
1.2 研究方法
1.3 研究対象
1.4 調査地概況
2. プロローグ
3. ドゥスンと月に関する先行研究の検討
3.1 就業日と休息日
3.2 月の名称とタブー
4. KD集落で聞き取った月とのかかわり
4.1 月の名称
4.2 月で判断する自然利用
5. エバンスとの比較
5.1 月のかかわり方の相違
5.2 精霊への態度
6. おわりに
7. 謝辞
付録：写真、参考文献、註

1. はじめに

1.1 研究の目的

本稿は、ボルネオ島北西部に位置するマレーシア・サバ州[1)]（図1）の都市近郊に居住する先住民ドゥスンの人々を対象に、彼らの自然資源を獲得するための活動の場で観察された「月」とのかかわりを報告することで、都市化が進むドゥスン社会において、今もなお実践されている自然資源を獲得するための活動の概観を描き出すことを目的としている。

東南アジア最大の熱帯雨林を有するボルネオ島は、1970年代まで混交フタバガキ混交林などの原生林で覆われていた。しかし、商業的森林伐採と、アブラヤシ、アカシア、天然ゴムなどのプランテーション開発などにより原生林の多くが消失し、熱帯雨林の環境改変と森林景観の変化が生じている。そのような熱帯雨林の環境改変や、森林景観の変化に伴った、ボルネオ先住民の従来の生活への影響が指摘されてきた（市川 2013; 金沢 2001; 根本 2015）。既往研究において、このような熱帯雨林の環境改変が森林に依存して暮らしてきた人びとの生業の変化についての指摘がある。内藤によれば、内陸部に居住するサバ先住民の生業は、森林産物採集から商

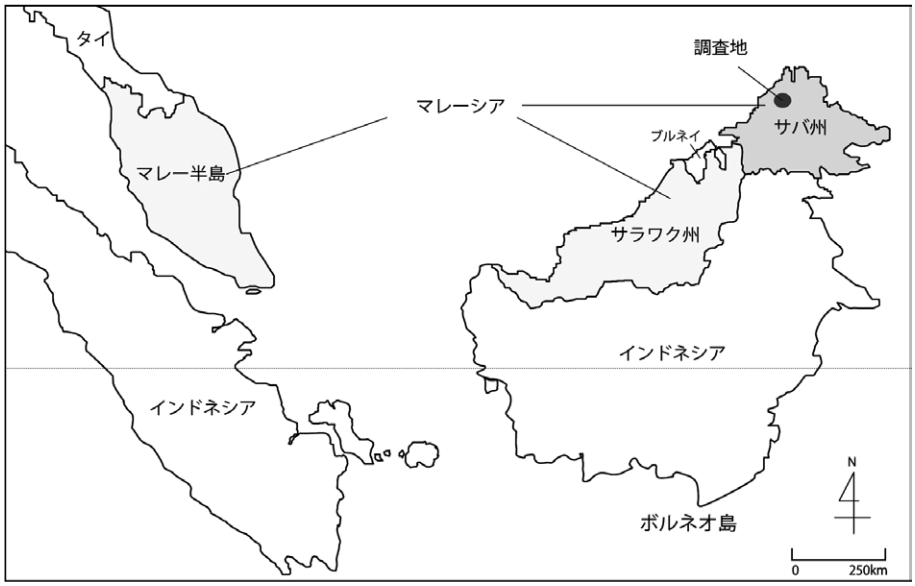


図 1　調査地サバ州とその周辺諸国（筆者作成）

業伐採やプランテーション化に伴う伐採労働への転換だけでなく、希少化した森林資源の管理強化のために導入された森林認証制度に関連した変容が起きている（内藤 2014）。

また、ボルネオ先住民社会では宗教の変容も著しい。近年ではボルネオ先住民社会全体において先住民のキリスト教化、イスラーム化が進んでいる。本稿が対象とするドゥスンの宗教は、内陸部に居住する先住民の文化的共通性[2] に通底していた。キリスト教が普及する以前は、内陸部の先住民の大多数が、世界の創造者である最高神と諸精霊の存在を信じ、それらに対する信仰と儀礼を軸とした民俗信仰[3] に従っていた（内堀 1986; 長津 2005: 199）。近年では、多くのサバ先住民が外来の宗教を選択しており、1950年代のカダザン・ナショナリズムが興隆した時代と、1963年のマレーシア加盟後を経た1970年以降にキリスト教に改宗する先住民が増加した（石井 2015: 7; 長津 2005; 山本 2006）。

長津が提示したサバ州における宗教人口の推移を参照すると、1911年は民俗宗教57％、イスラーム29％が、キリスト教2％であった。植民地末期の1960年には、ムスリム人口の割合が38％、キリスト教が17％を占めている（民俗宗教は不明）（長津 2005: 200–201）。2010年のセンサスにおけるサバ州の宗教割合はイスラーム、キリスト教、仏教、ヒンドゥー、華人伝統宗教、無宗教（*tiada agama*）、その他宗教（line-line agama）、不明（*tiada diketahui*）で統計が取られている。民俗宗教は「無宗教」と「その他宗教」、「不明」に含まれると推察される。ドゥスンの人々が属する「カダザン・ドゥスン」の宗教割合を参照すると、イスラーム22.68％、キリスト教74.80％、仏教0.59％、ヒンドゥー 0.01％、華人伝統宗教0.01％、その他宗教0.08％、無宗教0.59％、不明1.25％である。この統計から、近年のカダザン・ドゥスンの7割がキリスト教を信仰しており、民俗宗教は、「無宗教」と「その他宗教」、「不明」を合算しても2％にも満たず、少数であることがわかる（Department of Statistics, Malaysia（以下DOSM）2010）。

本稿が対象とするKD集落のドゥスンの人々は、全住民がキリスト教の教派ローマ・カトリック[4] を信仰している。彼らは、カトリック改宗以前の民俗信仰を強く否定し、カトリックの教えに敬虔であることが正しい生き方であるという姿勢を、筆者に対して頻繁に示した。その一方で、狩猟採集や漁労、農耕など自然資源を利用する活動の場において、彼らが否定的に語る民俗信仰をしめやかに実践する様子をこれまでに観察した。

本稿のテーマである「ドゥスンと月とのかかわり」については、コタ・ブル地域に居住するドゥスンについて1940年代に実施された調査に基づく報告がある（Evans 1953）。コタ・ブル地域と筆者の調査地はサバ州の西海岸地域にあり、両地域の距離間は約70kmである（図2）。エバンスは報告の中で、ドゥスンの人たちの農耕活動における禁忌と月の精霊のかかわりについて論じ

図2　KD 集落と本稿で紹介する地域の位置関係を示した地図（筆者作成）

ている。そこで、本稿では、3章でエバンスによる1940年代のコタ・ブル地域のドゥスンと月の報告を概観し、4章で、筆者が現地調査で収集した、KD集落のドゥスンの人たちと月とのかかわりを報告する。そして、5章では、両者の月とのかかわりの相違を概観する。はたして、月と民俗信仰のかかわりが指摘されている1940年代のドゥスンと、精霊の存在を否定しながらも、人々が自然資源を獲得するための活動の場において民俗信仰が立ち現れる2000年代の都市近郊に住むドゥスンの人たちの間では、月とのかかわり方にどのような違いがあるのだろうか。両者の比較により、筆者が集めたデータKD集落で月はどのような役割があるのかを検討し、それにより、近代的な営みと自然資源を獲得するための活動が絡み合う、現代ドゥスン社会の自然とのかかわりの一端を明らかしたい。

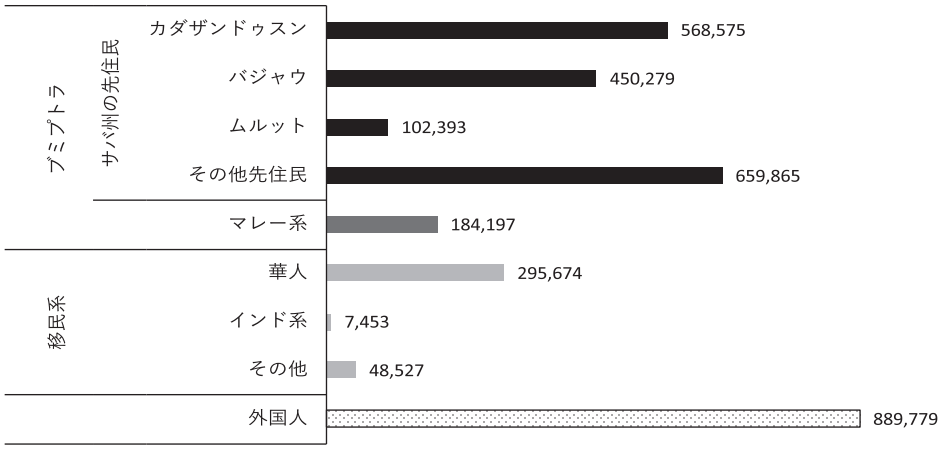
1.2　研究対象

本稿が対象とするドゥスンの人たちは、ボルネオの北西部に位置するサバ州の先住民である(図3)。ドゥスンの人たちは、しばし、政治的・歴史的な文脈の中で「カダザン」や「カダザン・ドゥスン」と表記されることがある。たとえば、2010年のセンサスを参照すると、サバ州の先住民は「カダザン・ドゥスン」、「バジャウ」、「ムルット」、「その他先住民」の4つの民族集団で統計がとられている。

しかしながら、筆者の現地調査において、カダザンとドゥスンは、お互いにそれぞれ違う民族集団であるという説明を頻繁におこなう[5)]。このように人々が自明する民族名と、公式の場で用いられる民族名に違いが生じた背景には、19世紀末以降のイギリス統治とそれに伴ったキリスト教の普及、さらに1963年の連邦国家マレーシア加盟にともなったナショナリズムとの関連がこれまでに報告されている[6)]（山本 2006, 2008; 上杉 2002）。

筆者の調査地域であるペナンパン郡は、カダザンを自明する人たちが多く住む地域である。しかしながら、KD集落を含む近隣の集落の人たちはカダザンではなくドゥスンであることを強調する。そして、カダザンとドゥスンの違いは、地域と言語であるという。彼らによれば、自分たちの祖先はクロッカー山脈の内陸部からこの地にたどりついた集団であり、自分たちは「丘から来た集団（*dari bukit*）」と話す。そして、カダザン語を話す集団がカダザンであり、同じペナンパン郡でもドゥスン語を話す私たちはドゥスンであると強調する[7)]。

調査対象者たちは、カダザン語とドゥスン語の言語的な違いを以下のように説明する。それ



出典）マレーシア統計局（2010 Population and housing census of Malaysia）の人口統計に基づく

図3　サバ州の民族構成

は、カダザン人は［za］と表現するところをドゥスンは［ya］と発語するという。例えば、ドゥスン語でカダザン人は「カダヤン人」、シャーマンをさす名称はカダザン語では「ボボヒザン」、ドゥスン語では「ボボリヤン」になるという。以上の点から。本稿では調査対象者の民族名を、彼らが自明しているドゥスンで表記している[1)]。

また、同じドゥスンを名乗る人たちでも言語や慣習に多様性が見られる。たとえば、民族衣装や伝統舞踏であるスマザウの様式、言語など、地域や村だけでなく、集落間によっても偏差がある[8)]。以上のような、ドゥスン社会の多様性と地域間の偏差について、ラターは平野部（6つのサブグループ）と山岳地帯（5つのサブグループ）の存在を紹介し言及している（Rutter 1922: 53–62）。

1.3　調査地概況

本稿の調査は、サバ州ペナンパン郡の平野部に位置するKD集落で実施した。KD集落は、サバ州の州都コタキナバルから道のりで南東へ約20km、ペナンパン郡の官公庁や市場、ショッピングモールなどの商店が集まるドンゴンゴン市街から道のりで約10km南東にある。交通状況が良ければ集落からはドンゴンゴン都市には約15分で出かけることができる。全世帯が自家用車を所有しており、住民は市街への出勤に車を利用している。また、不規則な運行スケジュールではあるが、集落の前を通過するバンと呼ばれる乗り合いバスに乗車し1.2リンギット（約34円[9)]）で市街に出ることも可能である。

KD集落は、クロッカー山脈の麓を流れるモヨグ川（Sungai Moyog）下流域の平野部に位置している。集落が密集する川沿いの標高は約30メートルである。集落は、竹や果樹、食用の野草などが自生した林一帯と、狩猟採集で利用している標高約200メートルの山林に囲まれている（写真1）。住民は、林一帯をゴートン（*gouton*）、森林地帯をドゥスン語でタルン（*talun*）、マレー語でフタン（*hutan*）と呼んでいる。集落には住宅付近の林部分を切り開いた、共同の畑がある。畑では主に自家消費を目的とした野菜を栽培している。集落内では、水牛や鶏、合鴨を放牧で飼養している。これらの家畜は主に冠婚葬祭に振る舞われる。以上のように、KD集落は、立地的に市街にアクセスしやすく買い物や就労が比較的容易だが、自然資源を獲得するための活動の場が現存している環境である（図4、図5）。

しかしながら、KD集落の人たちによれば、自分たちが利用してきた自然環境は年々縮小していると語る。彼らによれば、1960年以降に集落を囲む熱帯林の大部分が保存林に指定されたという。そのため、集落の人々は慣習権が認められた土地や、住民が取得した土地に限り狩猟や伐採、農耕などの活動が可能な状況である[10)]。1990年以降には、熱帯林の一部が国内外の企業に買い取られ、オイルパームや天然ゴム、アカシアの植樹が進められている。調査の間にも、森林の開拓によって日に日に山肌の露出が増大していく様子が観察された（写真2）。また、熱帯林だけでなく、農地の改変も進んでいる。2013年に、KD集落や近隣の集落で共同利用してきた稲作用の農地を閉じ、天然ゴムやオイルパームなどの栽培、宅地用の土地に転換ならび転売した。そのため、2013年以降、KD集落や近隣集落で持続的な稲作はおこなわれていない。

宗教面においてはKD集落の全世帯の住人がカトリックを信仰している（写真3）。外来の宗教が布教する以前のドゥスンの人たちは、ボボリアン（*bobolian*）と呼ばれるシャーマンを中心に、精霊との関わりを保持してきた。2018年の調査時に、KD集落において改宗以前の信仰を続けている人はおらず、住民の多くが改宗2世、3世である。彼らは、毎週土曜日の18時、もしくは日曜日の7時に2キロほど離れた教会のミサに通う。彼らが通う教会は、収容人数が約2000人と規模が大きく、近隣集落だけでなく、教会のない遠方の村からも人が集まる。ミサでは、カダザン人の神

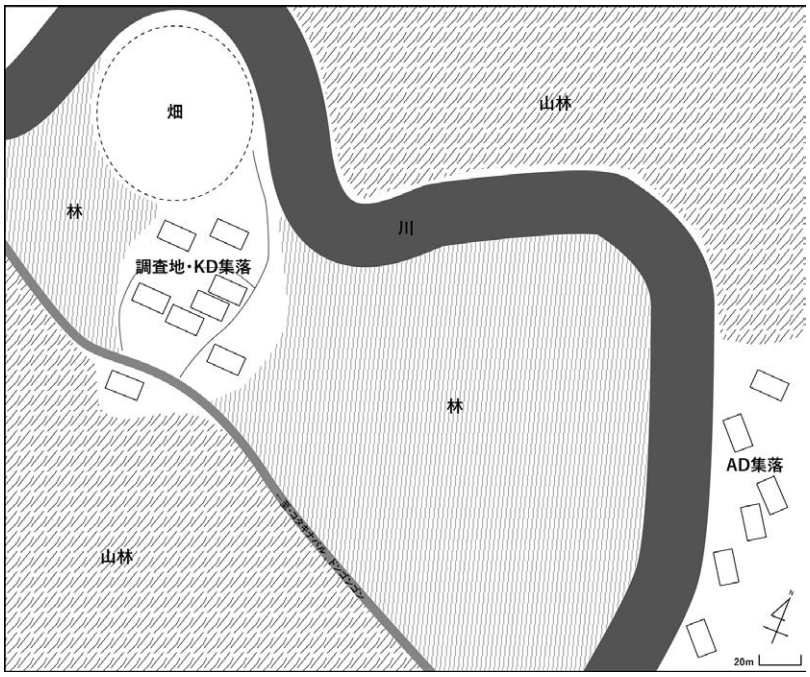


図４　KD 集落とその周囲の環境を俯瞰した図（筆者作成）

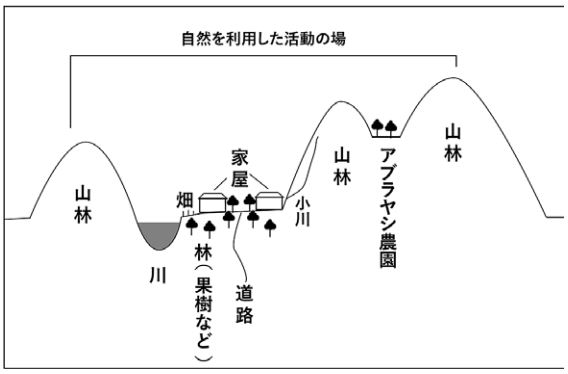


図５　KD 集落と住民が自然資源を利用する場の模式図（筆者作成）

父がカダザン語を中心に英語、マレー語を織り交ぜておこなう。人びとはミサや、日常生活でおこなう祈りを「サンバヤン（*sembahyang*）[11]」と呼ぶ。日常生活では、集落の全員がご飯を食べる前にカダザン語ならびに英語でサンバヤン[12] をおこない、一部の特に敬虔な人たちは、眠る前にサンバヤンの時間を設けている。

彼らの暦は、就労や就業に関してはマレーシア連邦ならびにサバ州が制定した休暇に即しているが、日常の生活、とくに精神的な側面においてカトリックの典礼暦にもとづいた生活をおこなっている。これまでの調査で確認したカトリックの典礼暦にもとづいた生活は以下である。集落では多くの住民が、毎週金曜日と、四旬節の初日である「灰の水曜日」、「聖金曜日」は肉食を避け、魚を食す。また、この期間の狩猟活動は望ましくないとされている。さらに、四旬節の間は、結婚式などの祝いごとは開催されず、集落で日常的に開かれる酒宴やカラオケなど、人が集まり宴を開催する行為は控える傾向にある。

筆者は、これまでに7つの村（12の集落）で悉皆調査をおこなってきた（2016年から2018年のべ18ヶ月）。そのなかで、昔の信仰を続けていた人との出会いは、KD集落から2キロメートル離れた隣のAD集落に居住する夫婦のみであった（夫婦ともに1934年生まれ）。人びとは彼らを「無信仰」という意味合いで「カーフィル（*kafir*）」。もしくは「宗教がない」という意味合いで「インガ　ウガマ（*ingaa ugama*）」と呼ぶ。そして、カトリック教改宗以前の信仰を「ムシム・ボボ（*musim bobo*）[13]」ボボの時代と説明する。本稿が対象とするドゥスンの人たちは、女性祭祀を中心に天地創造の神キノリガンと、その娘であ

る稲の精霊バンバアゾンに対する儀礼をおこなってきた。天地創造の神のほかにも死者の霊、悪霊、動物の霊などの精霊の存在を信じ、これらの存在がもたらす吉兆に対してさまざまな儀礼をおこなってきた（Evans 1923: 1–41）。

後述する本稿の調査協力者であるLC氏（1946年生まれ）の父親は、彼女の出身集落で最も力のあるボボリヤン[14]であったという。父親がボボリヤンでありながら、彼女がカトリックに入信したきっかけは、婚約前の夫がすでに入信していたためである。LC氏は、父親から猛反対を受けながらも、1960年代後半から教会に通いはじめ20歳で洗礼を受けた。そして、結婚を機に、夫の家族が暮らしていた現在のKD集落に住みはじめたと語った（2017年1月21日）。

集落の通信インフラに関しては、1978年にドンゴンゴン市街から集落に続く未舗装道が敷設され、1993年に舗装工事がおこなわれた。舗装工事がおこなわれるまでは4WDでしか市街にいけなかったが、2018年時点、普通車やモーターサイクルで市街に行くことが可能である。電力は、1981年にダムを利用した電力の配給がはじまった。水道は、熱帯林を流れる小川からパイプで供給し、下水処理はおこなわれていない。ガスは、プロパンガスを使用している。プロパンガスは集落から2キロ先の小売店で購入する。通信網は、2018年3月の時点で電話回線を引いている世帯は無い。しかし、携帯4社の4G回線が整備されており、集落では小学生以上の全住人がスマートフォンを所有している。彼らはWhatsApp、Instagram、Facebook、などのSNSツールを使ったコミュニケーションを活発におこなっている。家族内や近隣集落の友人同士のWhatsAppグループでは、収穫した野生動物の肉や野菜、作った料理の売買情報、カトリックの典礼暦にまつわる話題が頻繁に交わされている。

1980年以前に生まれた住民たちによれば「道路ができるまで、わたしたちは森の中に竹で作った1軒の家に家族で住んでいた。ここから3キロ先の小学校に行くには道がないので、川や川沿いを歩いて通った。今の私たちは、木造かコンクリート製の家に住み、見違えるくらいモダンになった。スマホがあるので、隣の集落の人たちともすぐに繋がれるし、この道路のおかげで病院にも、買い物にもすぐに行けるので本当に便利になった」と語った（2018年6月25日：1972年生まれの女性、1975年生まれの女性、1978年生まれの女性たちの会話から抜粋）。

1.4　研究方法

本稿のデータを収集した調査期間は、2018年6月から8月の約2ヶ月間である。KD集落の住民はドゥスン語を母語とするドゥスンの人々であり、その多くがカダザン語とマレー語、英語の読み書きならびに会話ができる。なお、調査に際して用いた言語はドゥスン語とマレー語ならびに英語である。

KD集落には8世帯46人が暮らしている（2018年時点）。集落の住民は、最年配であるLC氏、LC氏の子（6女、3男）とその家族で構成されている。LC氏とLC氏の未婚の次男と三男は同世帯で、既婚の子らはそれぞれ家族ごとに住居を構えている。住居の間は密接しており、各家庭への往来は容易である。筆者は2016年からLC氏の住宅の一室を借り、フィールド調査をおこなってきた。

本稿で提示されるドゥスンの人たちと月の満ち欠けに関するデータは、KD集落の住民（7名）と、KD集落に来訪していたAD集落の住民（1名）、パパール郡BG村の住民（2名）の計9名の聞き取り調査ならびに参与観察から得たものである。なお、AD集落の住民とBG村の住民はいずれもKD集落の住民の親族である。

表1は、聞き取りを行った9名の詳細を示したもので、上から①1946年生まれの女性（LC氏）、②1970年生まれの女性（KK氏）、③1972年生まれの男性（JO氏）、④1993年生まれの男性（RU氏）、⑤1992年生まれの男性（OP氏）、⑥1995年生ま

表１　本稿で提示するデータの調査対象者について

No.	名前	生まれ年	性別	職業	自然を利用した活動の内容	関係性など	世帯※
①	LC	1946年	女性	ゴム栽培	食用・薬用植物の採集、農耕、漁労	KD集落で最年長の住人	★
②	KK	1970年	女性	野菜の栽培	食用・薬用植物の採集、農耕	LC氏の長女	○
③	JO	1972年	男性	華人経営の会社勤務	狩猟、食用・薬用植物の採集農耕、漁労	KK氏の夫	○
④	RU	1993年	男性	小学校の警備	狩猟、食用・薬用植物の採集、漁労	KK氏とJO氏の長男	○
⑤	OP	1992年	男性	車の整備	狩猟、食用・薬用植物の採集、漁労	LC氏の三男	★
⑥	TO	1995年	男性	華人経営の会社勤務	狩猟、果樹採集、漁労	KK氏とJO氏のの三男	○
⑦	GB	1934年	男性	薬草の採集、販売	狩猟、薬の採集、漁労	AD集落在住/LC氏の遠縁	—
⑧	BM	1952年	男性	稲作、ゴム栽培	狩猟、農耕、漁労、食用・薬用植物の採集	BG村在住/LC氏の弟	■
⑨	MM	1952年	女性	稲作、ゴム栽培	食用・薬用植物の採集、農耕	BG村在住/BM氏の妻	■

※同世帯の住民に同じ記号を振り分けている。

れの男性（TO氏）、⑦KD集落から2キロ先にあるAD集落の1934年生まれの男性（GB氏）、⑧パパール郡のBG村に居住する1952年生まれの男性（BM氏）、⑨パパール郡のBG村に居住する1952年生まれの女性（MM氏）である。以上の9名は、狩猟採集、漁労、農耕の自然資源を獲得するための活動における参与観察の対象となった人物である。

2. プロローグ

2018年6月20日の昼食後、LC氏の家でLC氏の長女KK氏（1970年生まれの女性）、次女のML氏（1973年生まれの女性）と筆者の3人で村の伝統酒シカット（*sikat*）を飲んで談笑をしていた。突如、KK氏が何かを思い出したように「ねえ、フミ（筆者）は、チナ（中国）の文字は読める？そこのチナの暦に新月が書いてあったら、いつが新月だったか教えてほしい」と筆者の背後を指しながら尋ねてきた。

KK氏の指の先を見ると、華人の会社に務めるML氏の夫が勤務先からもらってきた広東語表記のカレンダーが貼ってあった。カレンダーには「新月」と「満月」の表記があったので、KK氏に今日が新月から7日目であることを伝えた。すると、KK氏は指を折りながら日にちを数え、そして「できたら今すぐにでも、このお酒を中断してさつまいもとトウモロコシ、インゲンを植えに行きたい。もし一緒に行きたいなら、新月から7日目の午後は、雨が降ることが多いので急ごう」と筆者を誘った。しかし、いざKK氏と家を出て畑に向かうというところで、雷が鳴り響きスコールが降り出した。KK氏は残念そうに肩をすくめ、わたしたちは再び酒の席に戻ることになった。筆者はKK氏に新月から約7日目に野菜を植える理由を尋ねた。KK氏は「新月から7日目に土の中で育つ野菜を植えると、ごろごろとたくさん育つから」と答えた。さらに野菜を植えるだけでなく、狩猟や漁労、薬草採り、家の建材を森に取りに行く日など、月の満ち欠けで判断してきたという（写真4）。KK氏は「小さ

い頃から、毎朝3時頃になると曾祖母に叩き起こされた。眠いからまぶたが落ちそうになると、曾祖母が両手でわたしの目を広げ、月を見て覚えろと怒られた。そして、今日の月が何か、何をすべきか尋ねられた。間違えると強く怒られ、ラタンや竹などでお尻を強く叩かれた」と語った。

以上のKK氏との会話や行動から、彼らが自然資源を獲得するための活動の活動を実践する際に、月を指針としている様子が示された。そこで、当該社会のドゥスンの人々がどのように月を読み、どのように月が人々の行動を規定しているのか、月の満ち欠けに関する聞き取り調査を実施した。

3. ドゥスンと月に関する先行研究の検討

筆者がKD集落で確認した、月とのかかわりは、ドゥスン社会全体に共通して見られるのだろうか。地域差や年代差による違いはあるのだろうか。以上の疑問を回収すべく、他のドゥスン社会における月とのかかわりと比較検討をおこないたい。そこで、本章では、コタ・ブル地方のドゥスンの宗教観をテーマに1953年に執筆されたエバンスの著書から、1947年に調査を実施した「ドゥスンと月」の報告を概観する（Evans 1953）。

3.1　就業日と休息日

エバンスは、サバ州北西部、西海岸に位置するコタ・ブル地域のトゥンパソック川流域に住むドゥスンのいくつかの村落で宗教観について調査をおこなった。エバンスによれば、当該社会のドゥスンの人たちは、月の満ち欠けによって「就業日（*morobuat*）」と「休息日（*tulandaat*）」の判断をしていたことを論じている。そして、月に規定される就業日と休業日は、主に農業に関連し、休息日に働くことは人びとのなかでタブーであった。なお、ドゥスン社会において、休息日を意味する*tulandaat*（以下、トゥランダート）は、農業にかかわる精霊の名前でもある（Evans 1953: 134）。エバンスによれば、精霊のトゥランダートは、人々の休息日に田畑で働き農耕の手助けをする、ドゥスンの人たちにとって普段は友好的な存在である。しかし、人びとが休息日に休まずに働くと、トゥランダートに農具があたり怪我をしてしまうという。そして、怪我をさせた者は、トゥランダートの怒りを買い、復讐（厄災）にあうとされてきた（Evans 1953: 134）。

ドゥスン語で月は*tulan*である。以上の報告から、エバンスが調査した地域のドゥスン社会では、少なくとも月は農耕にまつわる精霊が関連し、当該社会の人々の行動、特に農耕活動を規定する暦であったことが推察される。

3.2　月の名称とタブー

本節では、エバンスによるコタ・ブル地域カマダイアン村の月の名称とタブーの報告を概観する。エバンスによれば、カマダイアン村における休息日の月の名称は、その日に働いた人物に降りかかる厄災が関連しているという（Evans 1953: 134）。表1はエバンスによるカマダイアン村の月の暦（月の名称、名称の由来、タブーの内容、就業日／休業日）の詳細を記載したものである。エバンスの報告を整理すると、カマダイアン村での休息日は11日間（うち1日は目に持病がある人のみ休息日）で、就業日は18日間である。就業日と休業日に規則性はみられない。以下は、カマダイアン村の休息日とタブーの詳細を要約したものである。

〈カマダイアン村の休息日とタブーの詳細〉

a）1日目*Tonibul*（新月）：厄災の記載なし。

b）7日目*Ko-inturu　kosilau*（上弦の月）：の「7」を表す*turuk*は「滴り落ちる」という意味を持ち合わせていることから、この日に目に持病があるものが働くと、目に水が貯まるとされている。

c）13日目*Tawang*（満月）：この日に働くと灌漑用水路が破損する。

d）14日目*Talikud*：「背後」を意味する*likud*が語源。この日に仕事をすると背後で猿などの野生動物が作物を盗む。

e）16日目*Rampagas*：「小石」を意味する*nagas*が語源。犬が作物の上に小石のように糞を積み上げて作物をだめにする。

f）18日目*Timpuun*：「はじまり」を意味する*kotipuunan*が語源。どんなに頑丈に作ったフェンスでも「はじまり」を作った人に導かれ水牛がフェンスを突破し破壊する。

g）20日目*Katang*：「丸太」を意味する*watang*が語源。この日にタブーを冒したものは、招待された結婚式の日に、丸太のように寝込む病気になるが、後に回復する。

h）21日目*GIok*：*giok*は「ウジのような虫」である。この日に働くと収穫物はウジ虫などの被害にあう。

i）27日目*Sikulab*：「上目遣い」を意味する*mulab-kulab*が語源で、この日に働いたものは目が上に向くほどの病気になり、丸太のように寝込む。

j）28日目*Tonob*：「入る、侵入」を意味する*tumonob*が語源。水牛が侵入し、農作物をあらす。

29日目*Gogor*：「震える」を意味する*gagaran*が語源。タブーを冒したものは、震えるほどの熱が出る（Evans 1953: 135–136）。

エバンスは、1938年から広域的にコタ・ブル地域の村落で調査をおこなった[15]。エバンスによれば、村ごとに「月の周期」、「月の名称」、「タブーの内容」、「就業日／休息日の設定日」に相違があることを指摘している（Evans 1953: 135）。次項では、エバンスの報告から、村によって異なる月の事例を適宜、紹介する。表3は、エバンスが指摘した3つの村を取り上げ、それぞれの月の周期と、就業日／休息日、月の名称を筆者が表にまとめたものである。

月の周期

エバンスが指摘した月の周期は、以下のように3つのタイプがある。a）特定の周期で固定されている村：カマダイアン村の月の周期は常に29日周期。b）短い周期と長い周期が交互に訪れる村：タンバトゥオン村では30日周期と31日周期が交互に訪れる。c）新月の現れ方で周期が変動する村：タビロン村は新月の現れ方で29日周期か30日周期かが決まる。また、エバンスによれば、a）カマダイアンと、b）タンバトゥオンの暦は月の形、満ち欠けに則していない。一方で、c）タビロン村は、新月の現れ方によって暦を判断していたと報告している（Evans 1953: 135–144）。

エバンスは、a）カマダイアンとb）タンバトゥオンの月の暦に関して「月の形に則していない」の記述に留まり、詳細は述べられていない。そのため、この2つの村がどのように暦を利用していたのかは不明である。というのも、天文学的に考えると平均朔望月は29.53日である。このことから、新月の出現を基準にしていたc）タビロン村は月の形と月の名称のズレが起きにくいと推察する。しかし、周期日数が固定されたa）カマダイアンとb）タンバトゥオンの暦では、次第に月の満ち欠けと暦にズレが生じることが予測される。この2つの村は、暦の調整を行っていたのか、それとも調整をせずに暦を利用していたのか、また、新月の観察は重要でなかったのかという点に疑問が残る。

特定の日が休業日になる村と就業日になる村

エバンスは月の名称が同じであっても、村ごとに月とのかかわり方が異なる事例を述べている。たとえば、小石を由来とする*Rampagas*がつく日は、カマダイアンでは休息日である。一方で、トムブリオン村では半日休暇となる。また、前者の村では、休息日でありながらこの日に働くと、犬の糞が石ころを積むように溜まり、農作物がだめになる凶日である。一方で、後者の村

表 2　エバンスが 1953 年に報告したカマダイアン村の月の名称、由来、タブー、就業日／休業日について

月齢	月の名称	名称の意味	名称の由来（現地語）＝和訳	タブー	就業日／休息日
1st	Tonibul Salimpuunon kosilau	月の現れ始め。バナナの茎が、まだ青々としている時期。	*ontibol* [a]	— [b]	休息日
2nd	Ko-induo kosilau	2番めの*kosilau*	*duoh*＝2		就業日
3rd	Ko-intoluh kosilau	3番めの*kosilau*	*toluh*＝3		就業日
4th	Ko-ingapat kosilau	4番めの*kosilau*	*apat*＝4		就業日
5th	Ko-inlimoh lwsilau	5番めの*kosilau*	*limoh*＝5		就業日
6th	Ko-ingonom kosilau	6番めの*kosilau*	*onom*＝6		就業日
7th	Ko-inturu kosilau.½,	7番めのkosilau	*turuk*＝7 *turuk*＝滴り落ちる	目が悪い人が働くと、目に水が貯まる	目が悪い人のみ休息日
8th	Ko-inwalu kosilau	8番めのkosilau	*walu*＝8		就業日
9th	Ko-insiam kosilau	9番めのkosilau	*siam*＝9		就業日
10th	Ko-inhopod hosilau	10番めのkosilau	*opod*＝10		就業日
11th	Hating topod Koting topod	（See below）	*Topod*＝食べ残し		就業日
12th	Kopupuson kosilau	kosilauの締めくくり	*kopupuson*＝終わり		就業日
13th	Tawang	満月	*misawang do tulan*＝満月	この日に働くと、灌漑用水路が破損してしまう。	休息日
14th	Talikud	背後	*likud*＝背後、後ろ	仕事中に人の背中の背後で、猿などの野生動物が作物を盗む。	休息日
15th	Tontong	働き手にとって、なにもかも鮮明に見える	*montong*＝見る		就業日
16th	Rampagas	犬の糞害	*nagas*＝小石	小石のように積み上げられた糞が作物の収穫を邪魔する。	休息日
17th	Limbas	良きライバル	Libas＝仕事の早い男の名前		就業日
18th	Timpuun	はじまり	*kotimpuunan*＝はじまり（*puun*＝起源、幹）	どんなに頑丈に作ったフェンスでも「はじまり」を作った人に導かれ水牛がフェンスを突破し破壊する。	休息日
19th	Kompusan	水の流れ	mompus＝水がまっすぐ流れる	灌漑用水路の水流が早い日	就業日
20th	Katang.		watang＝丸太、幹	タブーを冒したものは、結婚式に招待されても丸太のように横たわる病気にかかるが、のちに回復する。	休息日
21st	Giok	毛虫、うじ	giok＝ウジ虫のような虫	収穫物はうじ虫などの被害に合う	休息日
22nd	Ko-induoh tindimoh.	2番めのtindimoh	*duoh*＝2		就業日
23rd	Ko-intoluh tindimoh.	3番めのtindimoh	*toluh*＝3		就業日
24th	Ko-ingapat tindimoh	4番めのtindimoh	*apat*＝4		就業日
25th	Ko-inlimoh tindimoh	5番めのtindimoh	*limoh*＝5		就業日
26th	Ko-ingonom tindimoh	6番めのtindimoh	*onom*＝6		就業日
27th	Sikulab	上目遣い	*mulab-kulab*＝上目遣い	タブーを冒したものは、目が上を向き、丸太のように横たわる病気になる。	休息日
28th	Tonob	侵入、太陽が穴の中に入る	*Tumonob*＝侵入、入る	水牛が侵入し、農作物を荒らす	休息日
29th	Gogor	震える	*gagaran*＝震える	タブーを冒したものは熱が出て震える	休息日

出典：Evans 1953: pp 135–136より作成
注：
a）文中で*ontibol*について詳しい説明はない。また、筆者の調査村において'ontibol'という単語を理解しているものはいなかった。これは、同じドゥスンを名乗る人たちでも、村によって方言の差異があるためである。
b）一日目の*Tonibul*は休息日であるが、この日に就業した場合のタブーの記述は文中になかった。

表3　エバンスの報告による村によって異なる月の暦

	カマダイアン村			タンバトゥオン村			タビロン村	
月の周期		29日周期			30日と31日 交互に訪れる		29日／30日 新月の現れ方で決まる	
暦の 決定要素		独自の計算法			独自の計算法		月の形	
1st	●	*Tonibul* *Salimpuunon kosilau*	M	●	*Tonibul / Salimpuunon kosilau*	M	● *Sikulab minsisilau*	½T
2nd		*Ko-induo kosilau*	M		*Ko-induo kosilau*	M	*Gogor minsisilau,*	M
3rd		*Ko-intoluh kosilau*	M		*Ko-intoluh kosilau*	M	*Ulan kopioh minsisilau,*	M
4th		*Ko-ingapat kosilau*	M		*Ko-ingapat kosilau*	M	*Ulan kopioh minsisilau*	M
5th		*Ko-inlimoh lwsilau*	M		*Ko-inlimoh lwsilau*	M	*Ulan kopioh minsisilau*	M
6th		*Ko-ingonom kosilau*	M		*Ko-ingonom kosilau*	M	*Kolintabczsan minsisilau*	M
7th		*Ko-inturu kosilau.½,*	T		*Ko-inturu kosilau.½,*	T	*Giok minsisilau,*	½T
8th		*Ko-inwalu kosilau*	M		*Ko-inwalu kosilau*	M	*Katang minsisilau*	T
9th		*Ko-insiam kosilau*	M		*Ko-insiam kosilau*	M	*Sumobul minsisilau,*	M
10th		*Ko-inhopod hosilau*	M		*Ko-inhopod hosilau*	M	*Tunian minsisilau*	M
11th		*Hating topod* *Koting topod*	M		*Hating topod* *Koting topod*	M	*Timpuun bosur minsisilau*	½T
12th		*Kopupuson kosilau*	M		*Kopupuson kosilau.*	M	*Kopopuson bosur minsisilau,*	½T
13th	○	*Tawang*	T	○	*Tawang*	T	*Tontoluk minsisilau*	M
14th		*Talikud*	T		*Talikud*	T	○ *Tawang*	M
15th		*Tontong*	½T		*Tontong.*	½T	*Talikud*	½T
16th		*Rampagas*	T		*Rampagas.*	T	*Tontong mintonob*	M
17th		*Limbas*	M		*Limbas*	M	*Rampagas mintonob*	T
18th		*Timpuun*	T		*Timpuun.*	T	*Limbas mintonob*	M
19th		*Kompusan*	½T		*Pagalatan*	½T	*Molot mintonob*	½T
20th		*Katang.*	½T		*Maulot*	½T	*Kompusan mintonob*	M
21st		*Giok*	M		*Katang*	M	*Katang mintonob*	T
22nd		*Ko-induoh tindimoh.*	T		*Giok / Salimpuuon tilimoh*	T	*Giok mintonob*	½T
23rd		*Ko-intoluh tindimoh.*	M		*Ko-intoluh tiliimoh.*	M	*Kolintab+asan mintonob*	M
24th		*Ko-ingapat tindimoh*	M		*Ko-ingapat tiliimoh.*	M	*Ulan kopioh mintonob,*	M
25th		*Ko-inlimoh tindimoh*	M		*Ko-inlimoh tiliimoh.*	M	*Ulan kopioh mintonob,*	M
26th		*Ko-ingonom tindimoh*	M		*Ko-ingonom tiliimoh.*	M	*Ulan kopioh mintonob,*	M
27th		*Sikulab*	M		*Kopopusan tilimoh*	M	*Sikulab mintonob*	½T
28th		*Tonob*	T		*Sukilab*	T	*Gogor mintonob*	M
29th		*Gogor*	T		*Tonob*	T	*Tonob mintonob*	T
30th			T		*Gogor*	T	*(Tonibul)* [a]	

出典：Evans 1953より作成
注：
●：新月　○：満月の日を示している
a）イバンズはタビロン村の月の暦について、29日の翌朝に月が出ていたら30日目の*tonibul*が追加されると説明している。また、29日の翌朝に月が見えず、その日の夕方に新月が確認された場合にも*tonibul*が追加されるが、この場合は30日目ではなく1日目になるという（Evans 1953: 143）。

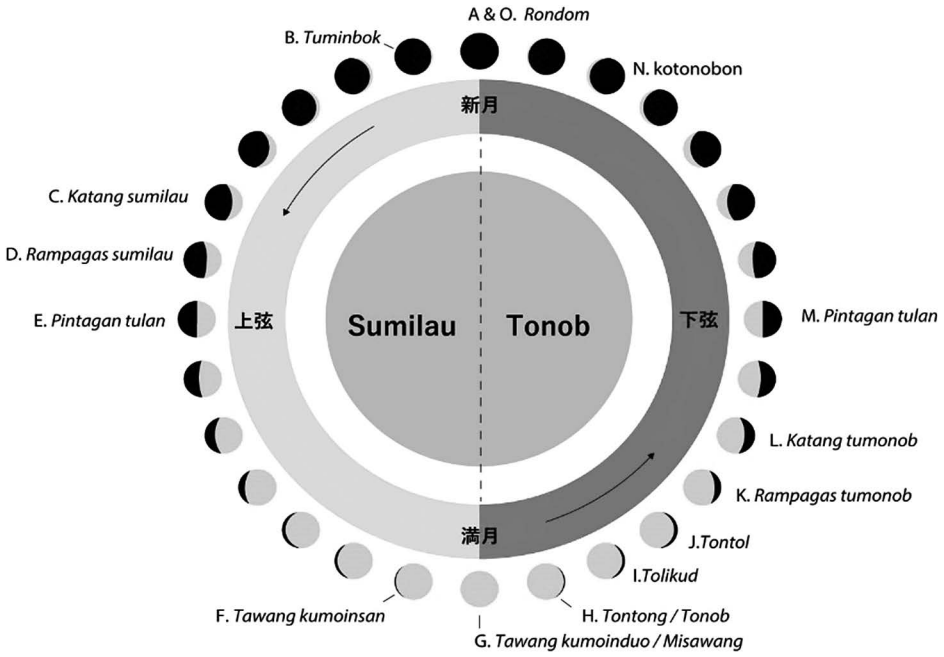


図6　KD 集落の月の位相とその名称（筆者作成）

では、とうもろこしやキャッサバ、さつまいもが小石のように連なって収穫ができるため、植え付けに適した吉日とされていた。このように、同じ名称でも村によって解釈が異なる点を報告している（Evans 1953: 137–138）。

4. KD 集落で聞き取った月との関わり

3章では1947年の調査を元に執筆したエバンスの報告を概観した。宗教、生業、生活世界の変容が置きている70年後のドゥスン社会と月はどのようなかかわり方をしているのだろうか。本章では筆者がKD集落で月と自然資源を獲得するための活動のかかわりについて収集したデータを提示する。

4.1　月の周期・名称

本節では調査で聞き取ったKD集落における月の周期と、月の名称を述べる。まずKD集落では、月の周期日数を明確に答える者はいなかった。というのも、KD集落では、月の形の観察によって、自然資源を獲得するための活動に適した日を判断していたためである[16]。なお、月の形で判断するため、天気の優れない日が続いた場合は、基準となる月（新月、半月、満月）から何日目か判断することもあった。

月の名称は、まず月の周期を大きく2つの期間に分けていた。新月から満月までの期間が「スミラウ（*sumilau*）期」、満月から新月に戻るまでの期間の「トゥモノブ（*tumonob*）期」である。

さらに月の満ち欠けにともなう15種類の名称が聞き取りで明らかになった。図6はスミラウ／トゥモノブ期の変化と、月の朔望に伴う15種類の名称を示したものである。名称の由来に関しては、月の形に由来しているものがほとんどであった。

KD 集落の月の名称と由来

a）1日目*Rondom*（新月）：月がないという意味。
b）約3日目*Tumimbok*：出現したて
c）約6日目*Katang sumilau*：*Katang*は丸太を指す（エバンスの報告と共通する）。
d）約7日目*Rampagas sumilau*：*Rampagas*は小石を意味する（エバンスの報告と共通する）。
e）約8日目（上弦の月）*Pintagan tulan*：*Pintagan*は半分を意味する。
f）約14日目*Tawang kumoisan*：*Tawang*は満月。

*Kumoisan*は一番目を意味する。一番目の満月という意味である。

g）約15日目（満月）*Tawang kumoisan* / *Misawang*：*kumoinduo*は二番目を意味する。二番目の満月という意味である。また*Misawang*も満月を意味する語句である。

h）約16日目*Tontong*：*Tontong*は見るを意味する。月が回転しはじめて、人を見ている様子から。

i）約17日目*Tolikud*：背後を意味する。月が人に対して背中を向き始める様子から。

j）約18日目*Tontol*：*Tontol*は鶏の卵。月の形が鶏の卵に似ているから

k）約19日目*Rampagas tumonob*：7日目と同様

l）約20日目*Katang tumonob*：6日目と同様

m）約22日目*Pintagan tulan*：8日目と同様

n）約27日目*Kotonobon*：*kotonobon*は方位の西を意味する。現時点で由来は不明である。

o）約29日目Rondom（新月に戻る）

4.2　月の位相で判断する自然資源を獲得するための活動

KD集落では、自然資源を獲得するための活動の最適な日を月の形で判断していた。集落の人たちが、月の形で判断していた自然資源を獲得するための活動は、1）農耕、2）採集、3）狩猟、4）漁労の4つの活動である。これら4つの活動の「最適である日」と「最適でない日」の聞き取りの中で、「柔らかい」と「硬い」の2語が頻出した。彼らによれば、月の満ち欠けに伴い、動物の皮や骨、樹木の幹や植物の葉の硬さなどの性質が変化すると考えられていた。

図7は聞き取りで明らかになった、月の満ち欠けで変化する自然の性質〈柔らかい／硬い〉を示したものである。新月から満月に向かうスミラウ期は〈柔→硬〉に変化し、満月から新月に向かうトゥモノブ期は〈硬→柔〉に変化する。最も硬いのが満月で、最もピークに柔らかいのが新月である。

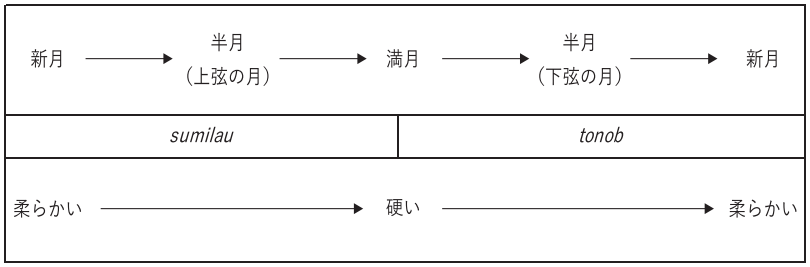
表4はKB集落において、月の位相で判断している自然資源を獲得するための活動の最適な日と最適でない日を示したものである。以下では、表4を参照しながら、月の位相で判断している1）農耕、2）採集、3）狩猟、4）漁労活動とその理由をそれぞれ順に報告する。

1）農耕

農耕活動は、a）葉菜類の収穫時期、b）とうもろこしやキャッサバ、さつまいもなどのイモ類を植え付ける日、c）野菜の種付けをする日、d）ドリアンなどの果実を植え付ける日、e）生姜、ウコン、ヤムイモを植えつける日、f）田植えに適した時期を月の形で判断していた。

a）葉菜類の収穫時期

KB集落で食す葉菜類は、クワレシダ（マレー語：*Sayur pakis* 学名：*Diplazium esculentum*）やアマメシバ（ドゥスン語：*Sikuk* 学名：*Sauropus androgynus*）キャッサバ（ドゥスン語：*Mundok* 学名：*Manihot esculenta*）、シダ科の植物（ドゥスン語：*Lombiding* 学名*Stenochlaena palustris*）の若葉である（写真5）。以上の葉菜類は栽培だ



（筆者作成）

図7　KB集落において月の位相で判断していた自然利用

表４　KD 集落で聞き取った月で判断する自然利用

		月の名称	農耕	採集	狩猟	漁労
1st	A	*Rondom*				
2nd	B	*Tumimbok*			k）狩猟に適した時期	
3rd				g）建材の伐採に適した時期		
4th						o）漁撈に適した時期
5th			a)クワレシダ、アマメシバ、キャッサバなど若葉の収穫に適した時期			
6th	C	*Katang sumilau*	c）野菜の種付けをする日		j）薬利用の植物採集に適さない時期	p）スッポンが捕獲しやすい
7th	D	*Rampagas sumilau*	b）とうもろこし、キャッサバ、さつまいもを植える日		l）センザンコウが捕えやすい。	
8th	E	*Pintagan tulan*				
9th						
10th						
11th						
12th						
13th			d）ドリアンなどの果樹を植える日	h）建材の伐採に適さない時期		
14th	F	*Tawang kumoisan*				
15th	G	*1) Tawang kumoinduo* *2) Misawang*	e）生姜、ウコン、ヤムイモを植える日			
16th	H	*1) Tontong* *2) Tonob*			m）最も狩猟に適さない時期	
17th	I	*Tolikud*				
18th	J	*tontol*				
19th	K	*Rampagas tumonob*	b）とうもろこし、キャッサバ、さつまいもを植える日			
20th	L	*Katang tumonob*				
21st						
22nd	M	*Pintagan tulan*				
23rd						
24th				i）建材の伐採に適した時期		
25th						
26th						r）漁撈に適した時期
27th	N	*Kotonobon*	f）田植えに適した時期			
28th					n）狩猟に適した時期	
29th	O	*Rondom*				

けでなく、集落や林一帯に自生しているものを採集することもある。これらの葉菜類は新月に新葉が出始め、新葉が成長した月齢約4日目から月齢約9日目までが若葉が多い期間と考えられている。そのため、この期間が最も収穫に適しているという。なお、月齢10日をすぎると葉は成長し固くなるので収穫に適さないという。

b）キャッサバ、さつまいもなどのイモ類やとうもろこしを植える日：*Rampagas* の日

キャッサバやさつまいもなどのイモ類、とうもろこし、いんげんを植えるのに適した日は、7日目の*Rampagas sumilau*と19日目の*Rampagas Tumonob*である。この日に植えると、収穫量が増えると言われている。エピローグでKK氏がイモ類を植えたいと語った日も（2018年6月20日）、この7日目の*Rampagas sumilau*の日に当たる。

c）野菜の種付けをする日：*Katang* の日

玉ねぎなど上述した野菜以外の野菜の種付けに適した日は、6日目の*Katang sumila*と20日目の*Katang Tumonob*である。

d）ドリアンなどの果実の種を植える日

ドリアン（マレー語：*Durian*　学名：*Durio zibethinus*）、ランブータン（ドゥスン語：*Rangalau* 学名：*Nephelium lappaceum* L.）、パラミツ（ドゥスン語：*Nangko*　学名：*Artocarpus heterophyllus*）、タラップ（ドゥスン語：*Timadang* 学名：*Artocarpus odoratissimus*）、ココヤシ（ドゥスン語：*Kelapa* 学名：*Cocos nucifera* L.）、マンゴー（マレー語：*Mangga*　学名：*Mangifera indica*　L.）などの果樹は、約13日目に種付けすると良いとされている。その理由は、この日に種付けをすると、大きくて美味しい実がつくからだという（写真6）。

e）生姜、ウコン、ヤムイモを植える日

生姜（ドゥスン語：*Layo*　学名：*Zingiber officinale*）、ウコン（マレー語：*Kunyit*　学名：*Curcuma longa*）、タロイモ（ドゥスン語：*Guol* 学名：*Colocasia esculenta*）は、約15日目の満月の日に植え付けると大きく育つと考えられている。

f）田植えに適した時期

田植えは約27日目の*kotonbon*と呼ばれる日におこなわれてきたという。なぜ約27日目に田植えがおこなわれてきたのかは不明である。また、2016年から2018年の調査では、KD集落における農耕活動は野菜や果樹の栽培に限られており稲作はおこなわれていない。しかし、KD集落の住民は、親族が居住するパパール郡に位置するBG村で田植えがおこなわれる際に手伝いに駆り出されることが多い。現在は、平日は働きに出ている人が多いため、BG村では人の集まりやすい*kotonbon*に近い土日に田植えをすることが多い[17]（写真7）。

2）採集

採集活動は、①建材や資材として利用する木材の伐採時期、②薬に利用する植物の収穫時期を月の形で判断していた。

①建材や資材として利用する木材の伐採時期

建材利用する樹木や竹の伐採に適さない時期は、スミラウ期間の約6日目からトゥモノブ期間の約18日目の約13日間である。その理由は、この期間の樹木は樹皮、辺材・芯材部が柔らかいからだという。そのため、適さない期間に収穫した建材は虫に食われやすく、その建材で建てた家や塀は崩れやすいとされている。

一方で、伐採に適した時期はトゥモノブ期間の約19日目から、新しい新月を迎えたスミラウ期にあたる約5日目までの約16日間である。この期間の樹木は樹皮、辺材・芯材部は固くて丈夫であるという。この月と建材利用に関して、以下のような事例が見られた。

事例

KK氏の10代の息子たちが、4月に近隣の竹林から収穫した竹でスラップ（*sulap*）と呼ばれる小屋を住居の横に建てた。しかし、スラップに使用した竹は適さない時期に伐採してきたという。KK氏は「虫食いがひどく今にも崩れそうだ」

と不満を漏らしながら、虫に食われている建材部分を筆者に見せてくれた（2018年6月27日）。

②薬に利用する有用植物の伐採時期

薬に利用する有用植物の採集に適さない時期は、約2日目から約12日目の約12日間のスミラウ期である。この時期に薬用植物の木の根っこや幹を採取すると、建材と同様に芯材部分が柔らかく虫に食われやすいからだという。

さらに、集落内で製造する伝統酒にも影響するという。というのも、薬用植物は、集落内でもっとも消費されているシカット（*sikat*）と呼ばれる伝統酒作りにかかせない。シカットは、米の蒸留酒にナガエカサ（マレー語：*Tongkat Ali* 学名：*Eurycoma longifolia*）やオタネニンジン（マレー語：*Pokok Akar Som* 学名：*Panax ginseng*）などの幹や根を漬けこみ作られる（写真8）。採集した薬用植物をドンゴンゴン市街の市場で販売しているGB氏（1934年生まれの男性）によれば（写真9）、上述の〈適さない時期〉に収穫した薬用植物は柔らかく水分が多いため、酒に漬け込むと酒が薄くなるという。集落で薄い酒は「アアナウ（*aanau*）」と呼ばれ好まれない。

また、GB氏によれば「スミラウ期間に採集した薬を摂取すると、良い方向に効かず、むしろ痛みが増大し病気が悪化する」という。その理由は、新月から満月に向かって月が大きくなるように、新月から約12日目のスミラウ期間に採集した薬用植物を摂取すると、痛みや病気も月に寄り添って増大するからだという（2018年7月13日のインタビューから）。

3）狩猟

狩猟活動では、①夜の狩猟実践に適した時期ならびに適さない時期、②マレー・センザンコウ（ドゥスン語：*tonggilling* 学名：*Manis javanica*）の捕獲しやすい時期の2点を月の形で判断していた。

①狩猟に適した時期と適さない時期

夜の狩猟の適した時期と適さない時期の判断は、月の明るさが関連しているという。図8は、月の明るさにともなって変化する「狩猟に適した期間／適さない期間」と「野生動物の活発度」を示したものである。まず、夜の狩猟の適した時期は、月明かりの少ない新月がもっとも狩猟に適し、新月から満月に向かうにつれて狩猟に適さない時期になる。そして、満月から新月に向かうにつれて再び狩猟に適した時期となる。次に、動物たちの活発度に関しては、新月はあまり動物たちの動きがなく、新月から満月に向かって活発度が増す。そして、満月から新月に向かってあまり活動的でなくなるという。

ここで、動物たちが活動的である満月に近い期間の方が狩猟に適しているのではないかと疑問が生じた。そこで、GB氏とJO氏、JO氏の息子のRU氏とTO氏、OP氏の5名に「満月に動物たちが活発であるなら、出現率が高く、狩猟に適しているのでは？」と質問をした。この筆者の質問に対して、全員が狩猟時に用いる懐中電灯が関係していると答えた[18]。

本稿では、OP氏のインタビューを抜粋する。OP氏によれば、「月明かりが届かない日に懐中電灯で動物を照らすと、動物たちは懐中電灯の光を月と勘違いしたり、驚いたりして、立ち止

新月 →	半月（上弦の月） →	満月 →	半月（下弦の月） →	新月
狩猟に最も適した時期	狩猟に適した時期	狩猟に適さない時期	狩猟に適した時期	狩猟に最も適した時期
活動的でない	少し活動的	活動的	少し活動的	活動的でない

（筆者作成）

図8　月の明るさにともなって変化する「狩猟に適した期間／適さない期間」と「野生動物の活発度」

まってこっちを長いこと見つめてくる。この時期は、森に動物は少ないが動きが遅く、懐中電灯に照らされても動かないので仕留めやすい。一方で、月の出ている日に懐中電灯で動物を照らしても、頭上に月があるので、動物たちは懐中電灯を月と思わず、人間だと気が付きすぐに逃げてしまう。この時期は動物の動きが早いので仕留めるのが難しい」と説明した（2018年8月3日）。また巣穴を狙った猟なども、月明かりが少ない日の成功率が高いという。さらに、月明かりの少ない時期に獲った野生動物の皮や肉が柔らかく、美味しいとされている。満月付近に狩猟した野生動物は「硬い」という意味合いのアラヌ（*aranu*）と呼ばれ、当該地域では好まれない。

②マレー・センザンコウの捕獲しやすい時期

2018年の調査時、KD集落ではマレー・センザンコウを対象にした狩猟はおこなわれていない[19]。そのため、本節で説明するマレー・センザンコウの狩猟は、1970年以前に生まれたKK氏とJO氏が昔話として語った内容である。マレー・センザンコウが捕らえやすい時期は、7日目の半月（上弦の月）から約13日目である。その理由は7日目の半月になると、毒性のアリやムカデが活動的になり[20]、巣穴から一斉に出てくるとされている。毒性のアリやムカデは「危険」という意味合いでコリゴゴン（*koligogon*）と呼ばれている。この時期は、コロゴンゴンを主食とするセンザンコウが捕食のために活動的になるという（2018年7月16日）。

4）漁労

漁労活動では、①漁労活動に適した時期ならびに適さない時期。そして、②マルスッポン（ドゥスン語：*Labi* 学名：*Pelochelys cantorii*）の捕獲しやすい時期を月の形で判断していた。

①漁労に適した時期と適さない時期

漁労に適した時期と適さない時期については、月の満ち欠けによって魚の遅速が変化するという。魚の動きが遅い時期が漁労活動に適し、魚の動きが速い期間が漁労に適さないという。月明かりの少ないスミラウ期の新月から約9日目、トゥモノブ期の約24日目から新月の期間が魚の動きが遅い。そのため、この期間が漁労活動に適しているとされている。約10日目から満月にかけて魚の動きが早くなり、満月から徐々に動きが鈍くなるという。

集落でおこなわれている漁労活動は河川漁労である。集落では投網、水中銃、すくい網、筌を用いた仕掛け漁、毒もみ、釣り竿での漁がおこなわれている。集落では主に*siud*と呼ばれる手作りの持ち網を用いた漁がおこなわれている（写真10）。*siud*は60cmほどの大きさで、川の中に網をいれながら移動して移動している魚を探しながら捕獲するので腕力を必要とする。目の前に現れた魚をすくい上げるには、動きが早い魚よりも動きの遅い魚が捕らえやすいからだという。

②マルスッポンの捕獲しやすい時期

マルスッポンはKD集落では日常食である（写真10）。レモングラスや生姜、にんにくなどと一緒に煮込んだスープや、甘い醤油で炒めたものが一般的である。また、捕獲したスッポンをペットや冠婚葬祭時の調理用として飼育する家庭もある。

マルスッポンの捕獲は、エビなどの甲殻類の脱皮に関連があるという。月の位相で判断する、マルスッポンが捕獲しやすい時期は約6日目の*Katang sumilau*から数日間である。というのも、この期間はエビなどの甲殻類が脱皮をする〈柔らかい期間〉であるという。そのため、エビなどの甲殻類を捕食するマルスッポンが脱皮で動かなくなったエビを探すことから、この期間はマルスッポンに遭遇しやすいと考えられている（写真11、写真12）。

5. エバンスとの比較

本章では、1940年代のエバンスの月との関わ

表5　エバンス（1953）のドゥスンと月の報告と、筆者のドゥスンと月の報告

	エバンス（1953）※1	KD集落（2018）※2
月の満ち欠け	暦として機能	自然を利用した活動の指針
月の判断基準	1）一定の周期で変化 2）新月の現れた日を基準に判断	月の形で判断
月の満ち欠けで判断していた活動	農耕活動	農耕・狩猟・採集・漁労
月の満ち欠けで判断していた事象	就業日／休息日	・自然の性質の変化 ［柔らかい→硬い→柔らかい］ ・野生動物の活発度
禁忌・精霊との関わり	あり	なし？

※1はEvans（1953）に依拠。※2は筆者が記録したもの

りと、現代の都市近郊で生活するドゥスンの人たちと月のかかわりの相違について概観したい。

5.1　月のかかわり方の相違点

まず、エバンスの報告と筆者の報告の相違点を概観したい。表5は両者の月との関わりを示したものである。両者の大きな違いは以下の三点である。第一に、KD集落では、エバンスが指摘した「月の精霊トゥランダート」に関連する「就業日や休息日」やタブーにまつわる語りは、2018年の調査段階で口にした者はいなかった。第二に、エバンスの報告の大部分が月と農耕活動のかかわりであったのに対し、KD集落では、いずれも集落内でおこなわれている狩猟、採集、漁労、農耕の4つの活動とかかわりがあった。活動実践をその周期が一定の法則に基づいたもので月の形で判断していた。第三は、エバンスの報告では、月の暦の周期が村ごとに規定された一定の周期であったのに対し、KD集落はその日の月の形で、自然資源を獲得するための活動の最適な日を判断していた。

以上の点から、エバンスの報告したドゥスン社会においては、月は農耕活動を実践するための暦として機能していたことが推察される。また、当該社会では農耕活動の「就業日」と「休息日」が特定の周期内で細かく設定されており、この周期が精霊のタブーと関連していたという報告から、当該社会では農耕が中心的な生業であり、民俗信仰がひとびとの生活を規定していたことが窺える。一方で、筆者が観察した都市近郊のKD集落における月とのかかわりは、人々の行動を規定する民俗信仰は見られず、月の引力で変化する自然資源の生態に関連した知識の側面が強いといえよう。

5.2　精霊に対する態度

すでに述べたとおり、KD集落では、カトリック改宗以前の民俗信仰を強く否定し、カトリックの教えに敬虔であることが正しい生き方であるという姿勢を筆者に対して頻繁に示した。一方で、人びとは狩猟・採集・農耕・漁労活動など自然とのかかわりの中で精霊への語りかけや、態度をしめやかに実践していた。また、語り手が森や川で精霊と遭遇した話や、知人が自然資源を獲得するための活動の場で、精霊や悪霊に遭遇した経験を酒の席や雑談の場で語るという状況もたびたび観察した。このことから、彼らの社会の中で精霊の存在は自然とのかかわりの中で顕在化し、精霊に対する慣習が現在でも部分的に維持していると言えるだろう。

しかしながら、KD集落では月の「精霊」や「禁忌」を人々が語ることはなかった。彼らが実践する自然資源を利用する場では精霊とのかかわりが見られるのに、自然資源を獲得するため

の活動の指針となる月とのかかわりにおいて精霊や禁忌についての語りがなかったのはなぜだろうか。この問題を解決するために、彼らが精霊や禁忌の語りを口にしなかったのは意図的なのか、それともすでに彼らの中でないものとなっているのか、もともとKD集落では民俗信仰とかかわりがなかったのか、さらなる検討が必要である。そのためにも、今後は当該集落におけるさらなる調査と、近隣や内陸部の村落との比較調査を重ねていきたい。

6. おわりに

本稿では、1940年代の月とドゥスンについて調査を実施したエバンスと、現代の都市近郊で生活するドゥスンの人たちの月で判断する自然資源を獲得するための活動についての現地調査結果を報告し、両者の相違を検討した。両者の大きな相違は、エバンスの報告が、農耕活動と精霊のかかわりであったのに対し、KD集落の月とのかかわりは自然資源の生態学的知識という側面が強かった。しかしながら、農耕面で特定の作物を植える日や月齢の名称に共通性が見られることから、KD集落では、民族信仰の側面が影を潜め生態学的な知識のみが継承されていると推察している。

エバンスが調査を実施した1940年代は、ボルネオ先住民社会をとりまくあらゆる変化の兆しがありながらも、宗教の変容や生業の変化がそれほど大きくなかった時代である。一方で、筆者が調査した都市近郊に位置するKD集落は、これまでに指摘されているボルネオ先住民社会のあらゆる変容が起きている。しかし、そのような変容の中で、今もなお継続的に自然資源を利用する活動を実践し、さらに、自然資源を利用する活動の場において人々が否定的に語る民俗信仰とのかかわりがこれまでに観察している。

本稿の、月を読む行為をテーマとした調査から、KD集落での自然資源を利用する活動と宗教観を探る参与観察へとつながった。このことから、本稿のテーマであるドゥスン社会の「月」とのかかわりを検討することは、人々の自然観、さらに、彼らをとりまくあらゆる社会変化の様相を読み解くことができるのではないだろうか。

人びとと自然や動物に対して形成する知識は、伝統的な生態学的知識、在来の知識、土着の知識と呼ばれてきた（大村 2002; 市川 2012; 加藤 2012）。これらの知識は変わりにくいものとみなされやすく、近代化に適応できずに消失をもたらすと考えられてきたが、近年は知識の可変性や可塑性に注目が集まりつつあると論じている（加藤 2012）。本稿で報告した、月とのかかわりや、自然とのかかわりの中で顕在化する民族信仰は伝統的な生態学的知識と捉えられる。また、床呂はグローバル化に伴う地域社会の変容に関して、「グローバル対ローカル」といった二項対立図式に還元したり、「グローカル」論のように両者の折衷や相互浸透を語るのではなく、複数のグローバリゼーション[21]とそのレイヤー間の重層的な絡み合いとして描き出すような語り方を提唱している（床呂 2012）。

ドゥスン社会の研究では、ドゥスンの多様性や地域間の偏差がこれまで多く指摘されてきた（Evans1953: 9–11; Rutter 1922: 53–62）。グローバルの流れの中で、さらなる多様化が予測されるドゥスン社会において伝統的な知識の可変や可塑性や、複数のグローバリゼーションとそのレイヤー間の重層的な絡み合いを読み解くことが、当該社会の自然とのかかわり方の検討において重要になってくると考えている。そのことから、自然と人、そして宗教や生業活動の接点にあると推察される、当該社会と月とのかかわりを検討することは、人々の営みやその変容を理解するのに新たな視座をもたらすと思われる。

注

1）サバ州は1881 ～ 1941年まではイギリス北ボルネオ勅許会社、1941 ～ 45年までは日本軍占領下にあった。第二次世界大戦終戦後の1946年から

イギリス領北ボルネオとして直轄植民地を経て、1963年に独立後のマレーシア連邦に加盟。以降サバ州となった。

2）内堀は、内堀の言う、ボルネオの内陸部に居住する先住民の文化的共通性を見出すことができ、シャーマニズム、鳥占い、首級儀礼[2)]、複雑な葬送などの精霊信仰[2)]がおこなわれてきたことを指摘している。

3）本稿における、ドゥスンの人たちキリスト教普及以前の精霊との関わりが指摘されている信仰を「民俗宗教」に統一して表記する。

4）本稿ではローマ・カトリックをカトリックと表記する。

5）実際のところ、両集団とも文化的な共有点がいくつも見られる。しかし、両者から話を聞く限りでは、祖先の出身居住地や、特に言語的側面でお互いの民族集団の違いを明確に区別していた。

6）山本によれば、19世紀末以降この地への統治を確立していったイギリス人により、沿岸部のムスリム原住民、内陸部の先住北ボルネオ諸族、そして都市部の華人と大きく3つに分けて認識されていた（山本 2008）。さらに、ドゥスンという民族名称は、伝統的な支配階層であったブルネイ人に倣ったイギリス人が、内陸部の先住民を大別してドゥスンとムルットと名付けたことに由来する。本来、内陸部の先住民はそれぞれの地域ごとに固有の自名称を持っていた。それらのうち、ペナンパン出身のドゥスンがカダザンを自称していたことを報告している（山本 2008: 59）。

7）カダザン語もドゥスン語もオーストロネシア語族の北西オーストロネシア上語系ボルネオ語派ドゥスン諸語に属す。上杉は10のドゥスン諸語について報告している（上杉 2002: 121–125）。

8）これまでの調査で*suku*と呼ばれるサブ・グループの存在も確認できたが、ドゥスンのサブ・グループに関しては今後の研究課題とする。ドゥスンの民族概念と民族意識については（山本 2006: 47, 157–171）が詳しい。

9）2018年のレート（1リンギット約27–28円）を換算したもの。

10）先住民の慣習的な土地保有（customary tenure）は1930年土地条例において規定されている（都築 1999c: 61–69）。

11）サンバヤン（sembahyang）はマレー語ないしインドネシア語で「祈り」を指す。

12）食前のサンバヤンは英語でおこなわれていた。内容は以下である。「Let us Pray: Bless us, O Lord, and these thy gifts, Which we are about to receive, through your goodness, through Christ our Lord, Amen. ather, the Son and the Holy spirit Amen」

13）Musimはマレー語で「時代」や「季節」を指す。

14）一般的にボボリヤンは女性祭祀が中心であるが、力があれば男性もボボリヤンになれるとLC氏は語った（2017年1月21日）。

15）エバンスはイギリスの植民地期であった北ボルネオ時代の1910年に初めてチャーター会社の士官候補生として現在のサバ州に訪れる。

16）KD集落では月の形で自然資源を利用した活動に適した日を判断していた。また、「新月から2日目」や、「満月の1日前」、「*sumilau*半月の次の日」など、判断しやすい月から数えて表現することもあった。

17）筆者が同行したBG村の田植えは2018年7月8日、日曜日の月齢24日目に実施された。

18）インタビュー日時はGB氏（2018年7月13日）とJO氏（2018年6月27日）、JO氏の息子のRU氏とTO氏（2018年6月27日）、OP氏（2018年8月3日）である。

19）KD集落では1990年代以降にセンザンコウの出現数が減ったという。また、マレー・センザンコウは1997年に野生生物保護法で保護されており、ライセンスなしの狩猟は最高5年の懲役、最高RM50,000の罰金が課されるため、現在集落では狩猟の対象としていない。

20）この聞き取りに居合わせた女性陣たちは、アリやムカデが怖いからこの時期に森に入りたくないと語った（2018年6月27日）。

21）「複数のグローバリゼーション」について床呂は、グローバリゼーションは①大文字のグローバリゼーション、②プライマリー・グローバリゼーション③トランスナショナルなフローに大別され、この3つが重層的に繰り広げられていることを論じている（床呂 2012）。

参考文献

市川昌広・内藤大輔・生方史数（編集）
2010　『熱帯アジアの人々と森林管理制度―現場からのガバナンス論』人文書院。

市川昌大・祖田亮次
2013　「ボルネオの里の先住民の知」市川昌広ほか『ボルネオ〈里〉の環境学―変貌する熱帯林と先住民の知』pp. 1–14、昭

和堂。
上杉富之
2002 「マレーシア・サバ州における「越境」への社会・文化的対応：文化協会の動態に見る民族の再編成」『成城文芸』180: 126–73。
内堀基光
1987 「ダヤク」石川栄吉ほか『文化人類学辞典』光文堂
大村敬一
2002 「「伝統的な生態学的知識」という名の神話を超えて―交差点としての民族誌の提言―」『国立民族学博物館研究報告書』27(1): 25–120。
加藤裕美・鮫島弘光
2013 「動物をめぐる知」市川昌広ほか『ボルネオ〈里〉の環境学―変貌する熱帯林と先住民の知』pp. 1–14、昭和堂。
金沢謙太郎
2012 『熱帯雨林のポリティカル・エコロジー』昭和堂。
床呂郁哉
2012 「スール海域世界から見える複数のグローバリゼーションズ」三尾裕子・床呂郁哉『グローバリゼーションズ―人類学、歴史学、地域研究の現場から―』pp. 31–51、弘文堂。
内藤大輔
2014 「マレーシア・サバ州における森林管理の変遷と地域住民の生業変容」『東南アジア研究』52(1): 3–21。
長津一史
2005 「マレーシア島嶼部（サバ州）」『海外の宗教事情に関する調査報告書』pp. 189–212、東京：文化庁。
2014 「マレーシア・サバ州におけるイスラームの制度化―歴史過程とその特徴―」『東洋大学アジア文化研究所研究年報』48: 279–296。
根元昌彦
2015 「熱帯林破壊を先導するアブラヤシ農園の拡大―マレーシア、サバ州における土地利用の展開を事例として―」『鳥取大学紀要』13(3): 59–78。
山本博之
2006 『脱植民地化とナショナリズム：英領北ボルネオにおける民族形成』東京大学出版会。
2008 「プラナカン性とリージョナリズム：マレーシア・サバ州の事例から」『地域研究』8(1): 49–66。

Department of Statistics Malaysia (2012), *Statistics Yearbook Malaysia 2011*, Kuala Lumpur: DOSM
I. H. N. Evans
1953 *The Religion of the Tempasuk Dwsuns of North Borneo*. New York: Cambridge University Press
Rutter, Owen
[1922] 2008 *British North Borneo: An Account of its History, Resources and Native Tribes*, KK: Opus Pub.

2020年9月30日受付
2020年12月7日採択決定

写真１　集落の風景（筆者撮影）

写真２　集落を囲む熱帯林。奥の山が保護林地帯で手前の山では一部伐採が進んでいる。（筆者撮影）

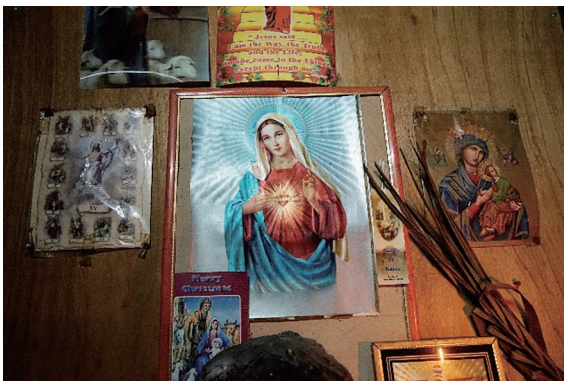


写真３　家の至る箇所に掲示されている聖画像（筆者撮影）

写真４　月の形を描きながら、月と自然について語る KK 氏（筆者撮影）

写真５　月齢６日目にキャッサバの若葉を収穫した女性（筆者撮影）

写真６　実が大きく美味しいと評判の木から取れたドリアン。良い月の日に植えたと語られていた。（筆者撮影）

写真 7　親戚が居住する村の田植えを手伝う KD 集落の人々（筆者撮影）

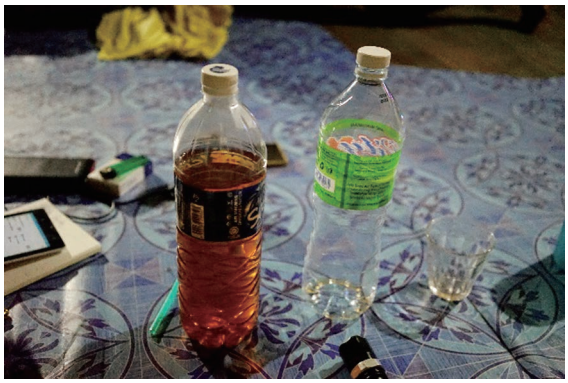


写真 8　sikat と呼ばれる薬用植物をつけた伝統酒（筆者撮影）

写真 9　市場で販売している B 氏が採集した薬用植物（筆者撮影）

写真 10　手製の *Siud* で魚の捕獲をする女性（筆者撮影）

写真 11　捕獲されたマルスッポン（筆者撮影）

写真 12　解体されたマルスッポン（筆者撮影）

The People Who Read the Moon:

Use of Nature by the Dusun People Who Live near the City of Sabah, Malaysia

NISHIYAMA Fumie

Department of Regional Studies,
School of Cultural and Social Studies,
The Graduate University for Advanced Studies, SOKENDAI

Summary

The main subject of this paper is the relationship between the moon and the indigenous people who live in Dusun near the urban area of Sabah State in Borneo. Through observation of their practices using nature, this paper aims to represent the outward appearance of activities that are still practiced in the increasingly urbanized Dusun society.

The people of Dusun have continued to live a self-sufficient lifestyle by hunting. gathering and fishing, making use of the tropical forests and rivers, using primarily the slash-and burn method and paddy cultivation. Their lifestyle of making use of nature is undergoing rapid changes because of changes in the environment of tropical rainforests; people's livelihoods; and their religious beliefs as a result of the political and economic changes at the national level.

The KD village where the Dusun people live, which is the focus of this paper, is located at the foot of a river flowing from the Crocker Range. While the village has easy accessibility to an urban area—approximately 15 minutes by car to the city of Penampang—it is surrounded by a tropical forest and as a result, the environment of the village, their livelihood, and their religious beliefs have changed, but their activities that make use of nature are still actively practiced. A survey conducted in 2018 revealed that they use the waxing and waning of the moon as a guide for their activities in nature.

The relationship between the Dusun people and the moon was already reported by Evans, who investigated Dusun society in the Kota Belud region in the 1940s. Therefore, in this paper, an attempt is made to examine the changes in the relationship with nature in Dusun society by comparing the results of the author's research with the reports of the Dusun and the moon by Evans.

Key words: Borneo, Sabah, Dusun, moon, use of nature, acculturation